

# 船団

第122号

特集

今、風立つ  
——俳句の前景

[ 連載 エッセイ ]

- 4 日本語ノート⑦④解釈 森山卓郎
- 
- 6 今日の川柳⑦④古代ギリシャ柳人パチョビスコス 芳賀博子
- 
- 20 私と俳句⑫絵手紙と俳句 内藤美穂
- 
- 22 映画に恋して、俳句に恋して⑫わかりやすさ 衛藤夏子
- 
- 24 会員リレーエッセイ⑭詐欺のハガキが来た 野本明子
- 
- 26 会員リレーエッセイ⑮俳号をつけてみた 杉山魯壘
- 
- 78 不器男の森から③不器男忌俳句大会と吟行の試み 川嶋健佑

[ 評論 ]

- 68 時代と文脈から読み直す⑧  
「第二芸術」?の桑原武夫? 鈴木ひざし

[ 書評 ]

- 80 船団の会編「船団の俳句」 野住朋可
- 
- 82 武馬久仁裕著  
「俳句の不思議、楽しさ、面白さ—そのレトリック」 川端建治
- 
- 84 会員作品
- 
- 120 今号の15句 塩見恵介・小西昭夫・中原幸子・木村和也・三宅やよい
- 
- 126 エンジンルーム

表紙・カット/山本真也 レイアウト/松山たかし・阪藤幸夫

[ 特集 ]

# 今、風立つ

## —俳句の前景

- 52 ビーマンとたんぼぼ—俳句トークあるいは俳話  
坪内隼典・池田澄子・小西昭夫
- 8 俳句30句 川端建治・阪野基道・森 弘則・山本佳代・  
平林ひろこ・武馬久仁裕
- 28 俳句12句 伊藤五六歩・梅津昌広・山本真佐子・山口久子・湯原正純・  
松永啓子・宮田和典・山本真也・弥生かんな・室 展子
- [ 第11回船団賞 ]
- 38 受賞作 とおい飢餓 SEIKO  
永久蘭 藤井なお子
- 
- 42 候補作 抱き締める 桐木菜子  
花のモーロク パートⅢ 平きみえ  
磯巾着とカップ麺 衛藤夏子 記憶 加藤綾那  
闇 小西雅子 青はあなたに 十 一
- 
- 48 選考にあたって 池田澄子・小西昭夫・ふけとしこ・火箱ひろ・坪内隼典

佐久間 ひろみ

野辺墓にたんぽぽ咲いた日曜日  
丸いすに猫かしこまる五月です  
パソコンと缶詰あける五月くる  
冷酒によったふりするDNA  
若葉風片足立ちでパンツ穿く  
内堀をうめてしまった朴の花  
ごみ捨ての穴は偉大だ若葉風

佐々木 麻里

桜待つひよこつとこそつと靴を買う  
春鴉てっぺん取ってみると言う  
心配の種は捨ておき春日向  
囀りの意中の人は貴方かも  
七代の手の雛あまた桜は葉  
糸桜「令和」へ向けて咲かんとす  
令和の御代のはじまる清和かな

澤田 薫恵

春昼や尻ふってチャボ走り出す  
樹木葬大声上げて桜散る  
一発の天のジエラシー春の雷  
一条の動かぬ鯉に春の日矢  
鞆屋の何んでも修理燕くる  
日と語り風と話して新茶摘む  
枇杷の種ぶつきらばうに罷り出る

塩谷 則子

抜けた歯を見せる六歳木の芽時  
三代目AIロボット麦を踏む  
受付の窓に四つ葉のクローバー  
鍬持ってコミユニティバス若葉風  
行く春を宇宙へ向かうハンバーグ  
お互いの記憶異なる蛍の夜  
出勤の群れに紛れる登山帽

●会員作品●

佐藤 香珠

窓を開けて湯屋に聞く蛙の遠音  
夏めくや新型自販機デビューせる  
熱の喉すべり落とせる氷菓かな  
白玉や坊守さんはたすき掛け  
母の日に贈られしシャツの鯨柄  
くれるならあの一山のさくらんぼ  
南風吹く御堂は障子開け放ち

佐藤 日和太

たんぽぽの囲む誰かの小さな碑  
春の日や指が絡んだ五稜郭  
鬼ごっこ鬼を飲み込む夕霞  
ハミングの音包み込む臘月  
夏空や色の足りないフェリー埠頭  
ピンキーとキラーズ知らぬサングラス  
肉好きの人の群がる炎暑かな

静 誠司

SMとSLは行く春の旅  
水温む38度の鼻の穴  
レタスでもなかなか直らない寝癖  
春浅しゆっくりゆっくり振り子時計  
リポビタンD一発で咲く桜  
臘月プリンはなめてから食べる  
春日の「しずか」の「し」でもあるバナナ

清水 れい子

つばめつばめ何にもないけどうれしい日  
梅干しや賞味期限のない仲で  
靴ぬいで靴下ぬいで夏はじめ  
そら豆のような顔して哲学す  
えりあしの綺麗な熟女春北風ならい  
ままごとに妹できて花菜飯  
鳥帰るチラシの裏の「ありがとう」

●会員作品●

つじあきこ

電波時計時々止まる春の星  
春ですよ死に方まだまだまだまだ白紙  
水の音昨日と違う種を蒔く  
明後日の指切りげんまん春帽子  
丸窓は小さなお城春の海  
笑顔笑顔くつ底みせて夏帽子  
矢車草白い昭和のお母さん

津田 このみ

うららかやあなたのなかの乳酸菌  
春の暮膝枕とは不安定  
菜の花やたこ焼き六つ分眠い  
フォンテーヌブローの森の素足かな  
怒ってばかり前頭葉に夏帽子  
白南風やぽんぽん叩く我が身体  
からっぽの椅子撫でてゆく夏の風

阪野 基道

挙国とは二度寝三度寝姫女苑  
えのころの声かもしれない他人の死  
白百合にエロス凍えて死はきれい  
鬼百合と夜な夜なたとえばなしする  
見えそうで見えない余韻ぎんやんま  
むぎゆと言ったか言わぬか虫つぶす  
パンジーの薄暮のような終わりかた

火箱 ひろ

鶴帰る夜明けの無糖缶コーヒー  
ハンガーの残るアパート鳥曇  
春や春先祖代々影法師  
父母を春の真中へ置いてくる  
亡父来ては梅の剪定して帰る  
菜の花の揺れてるあたり昔かも  
やわらかな声青菫菜の記憶ふと

●会員作品●

坪内 稔典

夢殿へ寄ろうかこのごろ若葉冷え  
蛭烏賊独り占めして親分は  
ねじ花へ寄って一人が三人に  
ねじ花のそばまで行って引き返す  
散らばってしかも無口にねじ花は  
ねじ花が最寄りの駅という日和  
九時からの哲学講座枇杷熟れる

中原 幸子

野の春の心の春の開けゴマ  
散りそめて雪柳とは白きもの  
暁の髪洗うときファム・ファタル  
初夏の君のわがまま黒光り  
さくらんぼ昨日の時計今日も鳴る  
山滴るもう一度つてことはなし  
冷素麺しずかに白き二人かな

陽山 道子

さくらの夜邪悪なところ育つころ  
木の名前探して書架の春の暮  
とある日音なく黄砂降りしきる  
たつぶりと春曙に接岸す  
あさってへミカンの花の咲くお家  
混沌と窓辺の赤いゼラニウム  
初夏につき早稲田の森の哲学者

藤井 なお子

如雨露から零す令の字四月馬鹿  
令色の蠟のこころの花衣  
冷でなく玲でもなくて桜咲く  
うららかや金糸卵を令夫人  
霊界へつづく令の字鳥曇  
鯉幟流れる方の辞令かな  
伝令のレシピ三行植樹祭

●会員作品●

村上 ヤチ代

献立の二択に迷ふ土佐水木  
定食にフオークか箸か花きぎぶし  
五升炊蓋の重しや柳絮飛ぶ  
花水木寸胴鍋の汁を混す  
松の花顎疲るる生野菜  
棕櫚の花フルーツ缶に色寒天  
給茶機の新茶ずずずずうずぼと

山岡 和子

鳥したり青空したりして桜  
淡交の友の集まり鳥帰る  
磯巾着話を元に戻しましょう  
青嵐池畔の椅子が特に好き  
青嵐行きたくないな歯医者さん  
筈さげし男に会釈虫待つ  
少年のような男だ虫一つ

近藤 干雅

花の雨品詞分解から始め  
『春望』の朗読が好き花の雨  
桜糞降るバブルは遠くなりにつけり  
二才児のお尻プリプリ緑さす  
若葉風死にたい年寄り十二人  
ふりそそぐ糺の森の若葉風  
バラ真つ赤愛は重たいものであり

山本 真佐子

結露の窓ひと息に拭くアガサクリステイ  
白い花ばかり残して三月ゆく  
桃の花蕾に息を吹きかける  
アルミホイルシヤカシヤカ芯だ春隣  
月朧「生活習慣病ですねん」  
青柳の鰻がぜいたく吾が生活  
屋上の重機のアーム五月闇

●会員作品●

小坂 恵美子

薔薇の芽を食ってみようかこんな日は  
あの犬はイヤという犬草若葉  
竜天に登るゆうらり足湯して  
バス停のじよたんぼへ開くドア  
花の木の巣箱の中に眠りたし  
パトカー・ツバメ・バスの着く港町  
靴職人の朝の体操新樹光

小西 雅子

キス用の一区画あり緑の夜  
夭折の詩人墓碑銘はアイリス  
ぶつきらぼうアスパラガスは空を指す  
新緑の広場に空腹のキリン  
JR遅延麦秋積み残す  
胸襟を開くポーズか守宮おり  
ビール飲む狩猟民族の末裔

高田 留美

どこまでを裾野と呼ぼう春夕焼  
柿若葉して妹の名はしづく  
神主の沓パカパカ初夏の雨  
本殿の藤を濡らして急の舞  
来たことのない駅に立つ麦の秋  
万緑や空より空のように池  
遠風に転がすバイク花蜜柑

わたなべ じゅんこ

春寂の橋の向こうは秋葉原  
梅咲いて青梅街道薄曇  
海老天の格差蕎麦屋に春の昼  
巨人に丸巨人に角花朧  
父宛の手紙を処分花三分  
花曇かきわけあさがや探検隊  
日向夏ころんと風に化けている

●会員作品●